長岡市立科学博物館　令和６年度 児童・生徒「昆虫標本展」

審 査 講 評

審査長　越佐昆虫同好会会員　中林　博之

胎内昆虫の家　館長　遠藤　正浩

越佐昆虫同好会会員　真嶋　豪

越佐昆虫同好会会員　榎並　晃

１　出品状況など

令和６年度の昆虫標本作品の出品数は 38 点となり、去年の 43 点よりやや少なくなりました。このことは学校単位での取り組みが縮小していることが大きな理由です。しかし、個人で新規に出品する人の数は昨年より増えており、これからも継続して参加されることが望まれます。

地域別には中越地域が 28 点、下越地域が 11 点、上越・佐渡地域からは出品がありませんでした。これまで出品の少なかった下越からの出品が増加しているのは喜ばしいことです。逆に上越・佐渡は例年になくゼロという結果になってしまいました。

今年の作品には、「南魚沼の水性昆虫」など特定地域の昆虫に着目したもの、「タガメの研究」など専門性の高いもの、さらには「十日町市のとんぼ」など多くの標本を作成してまとめた力作、また、採集状況に関する詳細なメモと豊富な写真による丁寧なレポートが添付されているなど、印象に残る出品が多かったです。加えて「はじめてのこん虫ひょうほんづくり」など、探求の世界へと第一歩を踏みだした作品もあり、これからの活躍を期待させてくれるだけでなく、標本展の意義を感じさせられます。

タイトルの設定、自己評価シートの「がんばったところ」は作品評価において重要なポイントです。何に興味を持ったのか、テーマと標本箱に収められている標本とは関連しているか、レポートには内容の説明がされているかが評価の対象となります。また、独創性として、一般に小中学生が採集しないような昆虫を対象としたものや、異なる環境での昆虫相の比較、特定の種の生態の調査など、よりテーマを深堀りした内容は高評価が付きやすくなります。

２　標本づくり、標本管理について

標本展出品の手引きにあるように、標本作成・管理についての基本的なポイントは押さえてある作品がほとんどでした。しかし、標本とデータラベルが分かれているもの、一部、同じ種で添付されていないものなどが目につき、これは評価としてマイナスとなります。また、標本の保管では、防虫剤での対策はほとんどの作品で行われていましたが、それでも標本害虫が入り込んでいるであろうものが一部見られました。標本箱の防虫対策ができていても、標本箱に

入れる前の段階で標本内に入り込まれることがあるので注意しましょう（これもマイナス評価となります）。

３　印象に残った作品など

科学博物館長賞および金賞となった作品を紹介します。科学博物館長賞は「柏崎と柏崎市周辺のチョウ Finai season 私の 4 年間のチョウ図鑑」です。アゲハチョウなどの大型の種からシジミチョウなどの小型の種まで綺麗に展翅された標本が、ドイツ箱 3 箱分に収められています。展示方法も工夫が見られ、データラベル・名前ラベルに加え、名前が見やすいように別の名前ラベルが各標本の近くに表示されていました。さらに、標本の配置方法も美しく見えるようにアレンジされていました。特にレポートは各種毎に分布図の他に写真とコメントが付けられ、一冊の本としても遜色ないものとなっています。是非、印刷物として公に発表していただきたいと思います。

「魚沼のトンボ　3 年目　～魚沼市のトンボ～」は 6 箱に及ぶ出品で、生息環境によって整理され、レポートには採集地の写真とともに場所についてのコメントが付されています。また、採集データも丁寧に整理されていました。出品者はトンボの専門研究家を目指しているとのことで、今後が楽しみです。

「カメムシ標本図鑑 2024」は、臭い虫として敬遠されがちですが、最近では人気上昇中のグループでもあるカメムシに特化した作品です。ドイツ箱 2 箱分を標本にし、レポートでは各種の写真と特徴、さらには「陸生カメムシ類の科への絵解き検索」と高度な内容が含まれています。

「柏崎のトンボ　シーズン 4」は、小学 1 年生からはじめて 4 年目、継続的な調査です。今回はこれまでに採ったことのない種の採集を目標に、これまでとは異なった場所での挑戦です。レポートは採集データが整備され、写真付きで今回の採集地が説明されています。結果の考察では、去年たくさんいた場所が環境の変化で入れなくなり、自然の変化の早さに気づいていました。昆虫は、昔は普通にいたのに今では姿が見られなくなってしまったもの、逆に温暖化の影響によると思われる、今までいなかった南方系の種が相次いで発見されるなど、長い目で地域を見ていくと様々な発見があります。これからも継続的な調査を頑張ってください。

「昆虫の進化と分類」は、2023 年夏から 1 年間、新潟県内のさまざまな環境でいろいろな昆虫を採集してまとめた作品です。科の特徴に注目して整理しています。レポートでは標本作製に関して「展翅・展足」、「形、色残し」について、苦労した点をまとめています。これからも試行錯誤を重ね、課題をクリアしていくことを期待します。

４　科学博物館　展示会担当より

今年は新たに作品作りに取り組み出品してくれた人が多く見られ、今後への期待を感じさせる年となりました。経験年数の長い人たちに混じって入賞するのは楽ではありませんが、標本作りの基本を押さえて、自分自身が何に興味があるのかレポートではっきりと表現することができれば、決して遠くはない目標です。来年また会えることを楽しみにしています。